

# 歴史の埋め役

## —— ギュンター・グラスの戦後 ——

依 岡 隆 児

Lückenbüßer der Geschichte  
—— Nachkriegszeit von Günter Grass ——

Ryuji YORIOKA

### 序

歴史家ゴーロ・マンは1968年6月18日のフランクフルター・アルゲマイネ紙で、「政治家」としてのギュンター・グラスのことを述べている。<sup>(1)</sup> それによると、グラスにとって作家とは社会の中にこそその居場所を持つ。それゆえ、彼は精神上の傲慢さを捨て、'Volk' に対してではなく、市民として市民へ語りかけるといふ。とはいえ、政治活動ゆえに文学のレベルを下げることもなかった。かえって、普通の政治家が簡略化するところを彼はニュアンスを付けて語ることができる。グラスにとって選挙は熱狂させるものではなく、「理性へのアピール」であり、白黒を対決させるというよりは、「より暗いグレー」に「より明るいグレー」を対置するものなのである。彼の SPD 支持は有名だが、SPD を「天啓」としてではなく、「強さも弱さも持つ党として、無尽の力を持つが自らを表現する能力は持たない党として」支持するのである。

ゴーロ・マンはこのように当時のグラスの SPD 支持について解説し、さらにその基本的な政治態度も指摘する。それによると、大連立に失望したにもかかわらず SPD を支持したグラスは、ヴァイマルの左翼のインテリのしなかったことをする「左翼インテリ」だといふ。グラスはどんなに国が不完全であれ、市民として国家機構を肯定するという立場をとる。政治・社会状況の改良は現代では外からではなく、内からのみ可能だと考えているのである。

グラスはNPDに入った若者をひとまとめにネオ・ナチと考えることに反対したとも、ゴーロ・マンは述べる。当時の若者たちからは「屑鉄」と言われたグラスだが、若者の持つ「不安」がそうさせたことを理解しようとしていた。ここでは彼は片足を学生の所に、片足は合法性と秩序を尊ぶ所に置いていたといえる。政治・社会を不完全だと批判はするが、アナーキーに走ることなく、あくまで議会制民主主義に即して社会改革を図ろうとするグラスの基本的態度がここにも明確に示されている。

必ずしもグラスと立場が同じでないこの保守的歴史家はこう述べて、最後にグラスこそベルリン市長に適わしい人物であるとして論を結ぶ。

また、大連立に反対して1966年に公開書簡を出したグラスに対して、ブランドは彼の率直な意見表明と連帯に感謝してから、さらにこう述べている。

あなた方は諦めとか単なる反抗の角隅に逃げこんだりしてはいけません。それではわが国の民主的左翼が貧しくなるばかりか、弱体化することにもなります。社会民主党の良心はこの党の外側で鼓動することはないのですから。<sup>(2)</sup>

ここでは、政党に背を向け議会外勢力に流れることなく、あくまでSPDという政党に「民主的左翼」による変革の可能性を見るようにと、ブランドは要請している。他方グラスは議会制民主主義に忠実で、この政治体制での変革を可能な限り追求し、また、ブランドを敬愛し続けたが、この「社民党の良心はこの党の外側で鼓動することはない」という言葉に対しては反発する。<sup>(3)</sup>むしろ、「社民党の良心」は党の内にしかないとする政党中心の思いあがりに対して、グラスはその後の市民としての政治参加を通して身をもって反論を試み続けたとさえいえるかもしれない。民主主義は底辺における市民の力によってなされるものであり、政党はその手段にすぎないというのが彼の基本的な考え方だったからである。従って、彼を狭い意味でのアンガージュマンの作家と捉えたと、例えば、彼とSPDとの決して固定されていたわけではない関係を見誤ることになりかねない。

ドイツ現代史の中でこうした同時代人としての作家を正統に位置づけるには、文化的側面ばかりでなく、このように政治的・社会的側面からも考察する必要がある。ここでは、グラスという人物の戦後を創作活動に限定することなく、

(2) Die Antwort Willy Brandts vom Montag, dem 28.11.1966. In: Günter GRASS Werkausgabe in zehn Bändchen. Bd. IX. Darmstadt 1987. S.964f..

(3) Günter GRASS: Das Gewissen der SPD. In: Günter GRASS, Über das Selbstverständliche. Neuwied 1968. S.128ff..

跡づけてみたい。それとともに、文学と歴史のひとつの関わり方を明らかにできれば幸いと思っている。

## 第一章 作家グラス

まず、グラスの経歴をその創作活動を中心に概観してみる。

1927年に生まれ、ナチスが台頭してくる全体主義の時代に成長し、一人前とみなされる前に終戦を迎え、アメリカ軍収容所で戦争犯罪について知らされる。故郷は当時国際連盟管轄下にあった自由都市・ダンツィヒである。しかし、ナチスのポーランド侵攻、次いでソ連軍の進駐で荒廃したこの地を追われ、戦後は東方難民としてドイツに移る。グラスはこうして二つの時代の間、二つの国のはざまで生きることを運命づけられていた。

このようなおいたちゆえに、彼の世代は戦後「懐疑世代」とも呼ばれるが、彼にも全体主義的なもの、画一主義とか民族主義、実体を伴わぬ観念といったものへの極度の警戒心が培われていた。いわゆる「やけどした子供」である彼らは、戦後になると経済復興の中に戦前と変わらぬものも嗅ぎつける。グラスは自分にとっても、特に五〇年代は鼻もちならぬ時代で、昨今のドイツの現状の根はこの時代にあるとさえ言う。

出世作『ブリキの太鼓』(’59)は失われた故郷ダンツィヒを舞台とする。これはナチズムを扱うものであるが、その原因の解明を試みようとするものではなく、それを支えた小市民を真正面から描き出す作品である。日曜日のナチスの催しに出かける無数の名も知れぬ小市民たちの存在抜きには、ナチスの台頭は考えられない。この小説の主人公オスカルはいわばこうした催しの「演壇のパトス」を「演壇の後ろからの視点」で見て、その魔力から逃れる。<sup>(4)</sup> また、こうしたまなざしが、制服を着てでかける日曜日の催しの退屈から「水晶の夜」の野蛮な破壊行為が生じてくる様を映し出す。他方、こうしたナチズムへの見方は、これを過去の歴史的出来事として片づけることを許さず、この小市民的同調者たちが今どこにいるのかを追求させずにはいない。そして、この認識がグラスに現代において底辺民主主義を成熟させる必要性を痛感させる要因となったとも思われる。続く六〇年代には彼はこうした批判を政治の世界でも実践していくが、ただその際にも、彼はあくまでいわゆる「憲法愛国主義者」であった。彼は革命にユートピアを見ることもなく、現実的観点から「より明るいグレー」

---

(4) Helmut KOOPMANN: Der Faschismus als Kleinbürgertum und was daraus wurde. In: Günter GRASS: Auskunft für Leser. ebd., S.106.

である政党 SPD に社会変革の潜在力を見、実際その選挙応援に奔走する。

その頃のグラスは、ダンツィヒ三部作(『ブリキの太鼓』『猫とねずみ』('61)『犬の年』('63)) 完結後とりあえず「過去」を扱うことをやめ、より現代的な問題に取り組む。『賤民が暴動を試演する』('66)『局部麻酔をかけられて』('69)『蝸牛の日記から』('72) はいずれも設定は戦後である。登場人物は教師、劇場の主任、作家というように知識人で、彼らが時代とぶつかる時の反応・葛藤が描かれる。53年の東ベルリンでの労働者の暴動、六〇年代の学生運動、大連立・小連立政権、そしてその間の選挙活動といった同時代の問題を扱いながら、彼は知識人の立場を検証・摸索している。例えば、『賤民…』は53年の東ベルリンの暴動を素材に、その時劇場で働いていた演劇主任がこの暴動に指導的役割を果たすことを周囲から求められるという設定である。これは弁証法劇によって民衆啓蒙を目指していた当時の大御者作家ブレヒトがモデルだったとされる。作品では、彼は結局抗議文を書く決意をするのだが、そうこうするうちに暴動はもはや彼を必要としない決定的事態を迎えることになる。ここでは知識人と現実との関わりがテーマとなっていて、現実政治の前では無力な革命主義的知識人たるブレヒト個人への批判とともに、その時の主任個人の葛藤・矛盾、現実とのずれに焦点が当てられているようである。しかしまた、こうした同時代のテーマを扱いながらも、現代においてもやはり分けがたく過去が影を落としていることも見逃されていない。『蝸牛』のアウクストは新教徒大会で自殺を遂げるが、彼はかつてヒトラーのナチスに共同体意識を求めたように現代でもそれを空しく求め続けていたのである。『局部麻酔』にはかつての負け戦を砂箱で作戦し直す老いた元帥が登場する。

グラスは現実政治では SPD を支援し、その修正主義に基づく議会制民主主義による改革の促進に共感するが、一方作品では政治的主義・主張では促えられない現実世界の複雑さや葛藤を描いているといえる。そればかりか、葛藤(Konflikte)の積極的評価は作品ばかりか、やはり彼の社会・政治参加の基本的考え方を成す部分でもあるようである。グラスによると、議会制民主主義の本質は、正にこの葛藤にある。

葛藤に耐えられないとデモクラシーの終わりが始まることになります。<sup>(5)</sup>

従って結論を言えば、葛藤とともに生きるということです。私はもっとアクティヴに推論したいと思います。すなわち、デモクラシーとは——そして私

(5) G. GRASS: Konflikte. In: Warkausgabe. Bd. IX. ebd., S.328.

たちみんなはその中に生きているのですが——葛藤でなりたっているのです。<sup>(6)</sup>

このように言うグラスは革命を夢見ずに、地道で根気のいる議会制民主主義を信奉しているといえる。啓蒙主義者を自認するグラスは、さらにこの葛藤を支える精神的態度として寛容を説く、

寛容であるとは、すなわち、矛盾に耐えることができることであり、妥協を解決として尊重すること、他の人の真実を、自分の真実の排他的要求から守ることなのです。<sup>(7)</sup>

寛容であろうと決意する者は、自分自身と寛容の反対者とのたえざる葛藤にさらされる。<sup>(8)</sup>

こうした発言からも、グラスが社会民主主義者となった理由は読みとれる。ここから修正主義者グラスにはあと一步なのである。

六〇年代後半は東方政策の進展で、彼は東側の作家たちとの交流を促進させようとする。また、その後のアジア・アメリカ旅行によって、より世界的でより本質的な問題にも関心が広がる。小説『ひらめ』(’77)は人類の歴史を石器時代から現代まで女性と「食」の観点から促え直そうとする壮大な物語であった。『舌を出す』(’88)では、人口増加、飢餓、スラム、貧困、環境破壊などの悲惨さを目にする一方、そこにこそ見られる人間の活力と尊厳に彼は圧倒され、言葉を失う。また、この悲惨さが先進国が原因であるという問題意識も強くする。小説『頭脳出産』(’80)、『女ねずみ』(’86)では、高まる核の脅威などによる人類の自己滅亡の危機と西洋文明の終焉を予感し、その向こうに地球の再生の可能性を求めようとしているようである。また、スラムの実状と難民流入を目のあたりにして、西洋中心的世界観は修正を迫られていると彼は見ている。(この意味ではバルガス＝リョサが後に、グラスの中米訪問における発言を、ラテンアメリカのキューバ化を念頭においているとして、それを西欧の価値観の押しつけであるとする批判はあたらない。<sup>(9)</sup>)

『女ねずみ』ではこうした変化がねずみの時代が人間の時代にとって替わる

---

(6) ebd., S.332.

(7) ebd., S.332.

(8) ebd., S.332.

(9) D. v. STEKELENBURG: Der Ritt auf dem Jaguar. In: Günter Grass: Ein Europäischer Autor (hrsg. G. Labrousse und D. v. Stekelenburg). Amsterdam 1992. S.169ff..

というグロテスクなイメージで展開されているが、こうしたグロテスクな変化への心づもりを、この頃の彼の創作活動は準備している。また、そこでは特に当時論議を呼んだ中距離ミサイルの西独配備と中性子爆弾のことが、語り手の夢の中の連邦議会演説で触れられており、時代を反映する。

また、八〇年代には作家が未来をあてにして書けるという従来の「自明性」は、今や幻想以外のなにものでもないという認識の深化がみられる。西ドイツのパーシングII配備決定はそれが人類滅亡をひき起こすポテンツを持つゆえに、防衛機能を果たしえないという論拠から、作家はもはや未来の知己を頼りにはできないという。しかし、その前提のもと、彼自身はそれでも書き続けるとも宣言する。最近では、国境を越えて広がる環境破壊をテーマとした作品『死の森』（'90）、東西ドイツ統一における問題をドイツとポーランドとの関連の中で扱った小説『鈴蛙の呼び声』（'92）がある。92年の評論『損失についての講演』<sup>(10)</sup>は外国人排斥運動の中でのトルコ人襲撃事件に対する彼の怒りの表出である。国境を自由に行きかう異質な存在たるジプシー的あり方こそ、新しいヨーロッパには必要なのだとその論は締めくくられている。

このように、彼の創作活動を中心にみると、彼は懷疑精神に貫かれており、葛藤は葛藤として、矛盾は矛盾として表現することで、それをとにかく「選挙戦用」の議論になりがちな自分の政治・社会活動に対する良きバランスとしていたようでもある。また、彼はその時々時代のより細やかな現実を吸収し、それらを自らの問題として受けとめる媒体として作品を用いていたようである。グラスの場合、創作活動は単なる現実逃避のためではないからである。むしろ、そこで、政治家には欠けがちな現実の生の決定的次元を明らかにしていく。それゆえ、彼は時代の抱える問題を洞察し、それに応じて自らの考え方、態度も修正することができたともいえよう。逆に言えば、ヴァイマル期にはいなかったというこうした新しいタイプの「左翼インテリ」の戦後を跡づけることは、それゆえ戦後ドイツ史を別の視点で見ることであるとも考えられるのである。

## 第二章 「徹底した民主主義者」への軌跡

終戦の日5月8日について、グラスはこう述べている。それは、

私の人生において区切りとなりました。この切り込みはそれ以来、十七歳の自分の無理解さがぼんやりとしか自覚されていなかったから、ますます深ま

(10) G. GRASS: Rede vom Verlust. Göttingen 1992.

っていきました。

軽症ではあるが榴弾の破片によって十分な負傷をしていたおかげで、私は大ドイツ帝国無条件降伏を野戦病院で迎えられました。その時まで、国家社会主義的な目標設定の意味の教練として、私は教育されていました。確かに、戦争の終わり頃には漠然とした疑念はあったが、レジスタンスなど考えてもみなかった。(…)殺人のための武器技術のほかに私はその時まで二通りのことを学んでいました。私は不安の裏も表も味わい、そして自分が生きているのは偶然だと知ったのです。<sup>(11)</sup>

十七歳の青年としてグラスは終戦を迎えたが、その体も心も傷ついた青少年期が残したものは不安の経験、そして生きているのは偶然だという認識だったという。この意味で、終戦の5月8日は彼個人にとっても決して消えない「区切り」だった。

捕虜収容所から1946年に釈放された十九歳の彼は、自分の国が犯した罪を徐々に知るようになり、愕然とする。この罪の意識についてはこう述べている。

今になってやっと、数年経つとますます恐ろしくなりながら、私は我々の世代の未来の名においてなんという恐ろしい犯罪がなされたかを知るようになった。十九歳になった私はだんだんとわかり始めていた、我々の民族が知ってか知らずか、なんという罪を重ねてきたか、そして私とその次の世代がなんという重荷と責任を担わねばならないかということ。<sup>(12)</sup>

この後、グラスは一時期カリ鉱山での労働を体験した。そこで彼は社会民主主義者たちと出会っている。1947年の春にはハノーファーでシューマッハーのしゃがれ声の演説を聞いた。そして、こうした社会民主主義者たちのおかげで、彼は「雲の中の目標なしで(…)生きることができるようになった」<sup>(13)</sup> という。

1949年に西ドイツがアデナウアー政権のもと誕生し、奇蹟の経済復興を遂げていくが、一方それと同時に社会では第三帝国の過去への反省がないがしろにされ始める。グラスは戦後政治においてドイツ分裂を固定化し、東西対立を決定づけたのはアデナウアー政権だったとみる。<sup>(14)</sup> この政権のもとで西ドイツ

---

(11) G. GRASS: Geschenkte Freiheit. In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S.891.

(12) G. GRASS: Rede an einen jungen Wähler, der sich versucht fühlt, die NPD zu wählen. ebd., S.163.

(13) G. GRASS: Ich klage an. ebd., S.129.

(14) 1954年にSPDのオレンハウアーは西ドイツの西側結合が再統一より優先されることを批判していた。

は復興を遂げ、主権回復、NATO 加盟、そして再軍備と進む。そして西側の一員として「戦勝国側」についているかのような錯覚が生じ、過去の過ちを糊塗しようとする社会風潮を助長した。「ダンツィヒ三部作」はそうした時代にあって、忘れられようとしている過去に彼がひたすらこだわり続けたことの所産でもある。現在に過去が追いついてくるというイメージが、過去を単に昔のこととして切り離してみる態度を許さず、またそれが日常の中に今や塗りこめられている過去の悪臭を嗅ぎ出す作家特有の嗅覚を鋭くしたと言える。彼の詩では、新築の住居の壁の中に塗りこめられた死体の雑音に新住民たちが日夜悩まされる、と歌われる。<sup>(15)</sup>

彼はまた、1953年にはベルリンにいて、労働者蜂起を目撃する。グラスは後年、これを労働者による自発的な民主化運動のめばえとして評価する。それに対してこの事件を東ドイツ当局は「反革命」、西ドイツ政府は「民衆革命」として、それぞれの陣営の宣伝に使ったと彼はみていた。それらはともに「労働者の反乱の偽造化」<sup>(16)</sup> だと言うのである。

美術学生だったグラスはその事件の一部を偶然目にした。デモが人民警察と対峙し、石が投げられ、ビラが配られ、キオスクが焼かれた。そして、バスで家路につく時、彼はもっと驚くものを目にしたという。その事件が起きている目と鼻の先のクーアフュルステンダムのカフェでは美しい婦人たちがケーキを食べていたのだ。そればかりではない、次の日の新聞ではもうこの事件はサッカーの試合の記事に追いやられ始めていたのである。<sup>(17)</sup> このような経験を通して味わうショックは権力による歴史の書き換えの問題とともに、歴史に対する世間の無関心さの認識として、グラスのアンガージュマンへ至る原体験となったといえるかもしれない。六〇年代にはこれを元に『賤民が暴動を試演する』という戯曲も書いた程である。最近ではまた、この作品をドイツ再統一に際しての知識人の問題とも関連させている。<sup>(18)</sup>

この間にオレンハウアー、ブラントラのドイツ統一の主張や、東西接近の試みは時代の中でおおわれていく。アデナウアー政権は「再統一」という言葉を巧みに使いながら、実際は東西分裂を準備してきた、とグラスはみる。その帰

(15) G. GRASS: Der Neubau. In: Werkausgabe Bd. I. ebd., S.202.

(16) G. GRASS: Es steht zur Wahl. In: Über das Selbstverständliche. ebd., S.46.

(17) G. GRASS: Es war nicht meine Absicht, den 17. Juni zu dramatisieren. In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.50f..

(18) Vgl. G. GRASS: Schreiben nach Auschwitz. In: Günter GRASS, Gegen die verstreichende Zeit. Hamburg 1991. S.42ff..



結が61年のベルリンの壁である。もちろんグラスもこれに抗議し、東の作家同盟あてに作家アンナ・ゼーガースへ公開書簡を書き、東の作家たちもこの非人間的な壁構築に抗議するよう呼びかける。<sup>(19)</sup> しかしながら、これが単に東の当局への抗議であるばかりでなく、同時に西のキリスト教保守政権に対する批判となっていることも忘れてはならない。西ドイツ側に対しては、当時のシュレーダー内相の緊急事態法、ニーダーバイエルンでのカトリック＝反ユダヤ主義の祝日の準備に、抗議するつもりだとグラスは述べている。この事件は西ドイツの戦後政治の帰結でもあったわけで、東側に対する怒りはそのまま西ドイツ国内政治のあり方にも向けられたのである。従って、東西ドイツの決定的分裂に抵抗するには、まずこの保守政権を打倒しなくてはならない、とグラスには思われた。

六〇年代になると、グラスは野党 SPD 支援とその選挙応援を買ってでる。61年の選挙戦でブラントが受けた中傷をきっかけに、グラスによるブラントのための初仕事が始まる。

これは私にとって最初のお機曾でした、ここベルリンから——ここで私はブラントとも知りあったのですが——直接手伝いをしたのです。これは地に足のついた手助けだったといえましょう。つまり、論文の修正、選挙戦用のテキスト作り、(…)をしたのです。それは、ブラントがここベルリンで壁構築に対する処理に手いっぱい、同時に西ドイツでの選挙戦をやらなければならない時だったからです。<sup>(20)</sup>

一方、SPD のための選挙応援演説は、1965年に52回、69年には190回、72年には129回にも及ぶ。この頃の演説を読むと、彼が社会民主主義を歴史的に理解し、ことにベーベル、ベルンシュタインを高く評価し、修正主義的側面を認めていることが明らかになる。民主主義は時代に即応して不断の修正を要すると説き、後の八〇年代におけるゴデスベルク綱領の修正論議に際しては、SPD 党大会でその弁護を行っているほどである。さらに、ドイツ問題についても、当時のエーゴン・バールの提唱する「接近による変化」という外交政策に理解を示している。さらに、看護婦職の地位向上要求とか中絶のタブー化への疑問など、かなり具体的な現状をふまえた議論をしていることも注目に値する。<sup>(21)</sup> ちな

(19) Vgl. G. GRASS: Und was können die Schriftsteller tun? In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S.33f..

(20) G. GRASS: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.450.

(21) G. GRASS: Des Kaisers neue Kleider. In: Über das Selbstverständliche. ebd., S.65.

みに、彼は有料のこうした選挙演説会で得たお金を、国防軍の兵士のための図書（図書）の拡充にあてることを計画してもいた。これは、なにより兵士は自らの判断力を養った責任ある市民であるべきだという考えにもとづく。そしてこの考えのもと、さらに選挙のあり方も批判し、十八歳徴兵の兵士に選挙権が二十一歳まで与えられないのはおかしいと問題提起する。

大連立政権に対しては、「みじめな結婚」として批判的で、ことに連邦首相ケージンガーと内務大臣グロープケのナチスとの関わりには激しく反発し、首相の座をとろうとしないSPDの態度にも失望する。ケージンガーへの公開書簡では、「当時の同調者たるあなたが今日あえて政治の方向を決めようとなさるなら、私たちはアウシュヴィッツやトレ布林カの死者たちをいかに思い出せばよいのか」<sup>(22)</sup>と問いかけている。また、ブランドへの公開書簡ではグラスは彼に大連立を思いとどまるようにと直言する。<sup>(23)</sup>ここではグラスはSPD支持者たちが二者択一を失い、左右に分裂することを懸念している。この時彼は、一般民衆、特に若者がこの後批判の拠り所をなくし、政治離れ、現実離れしていったことを正しく予測していたといえる。また彼は、65年の連邦議会選挙でCDU/CSUが勝利した時に、国民によって「ドイツ再統一」は放棄されたとみている。そして、この時点からグラスはドイツ問題について、今までの再統一主張を修正し、二つのドイツを前提とした「国家連合」、あるいは「文化国家」という構想を自説としていく。

APOの活動にはある程度理解を示すし、67年の学生オーネゾルクの死に対してはエンツェンスベルガーらとともに、扇動的なシュプリンガー系新聞を非難する声明も出している。しかし、その後の学生運動の激化に対しては良家の出の子弟たちの理想かぶれといった受けとめ方であった。議会制民主主義を擁護する立場のグラスには、こうした革命主義的な運動が広く民衆を動かさうとする力とはなりえないと思われたのである。

極左のテロに対しても、それが個人を組織の歯車にする論理を内在するゆえに、告発を辞さない。<sup>(24)</sup>反革命主義者としての、非暴力主義者としての発言も散見する。七〇年代のテロの激化に際してシュプリンガー系マスコミの扇動的な論調を知識人たちが批判し、かえって世論の反発を招いた時期には、グラス

(22) G. GRASS: Offener Brief an Kurt Georg Kiesinger. ebd., S.5f..

(23) G. GRASS: Offener Briefwechsel mit Willy Brandt. ebd., S.120ff..

(24) Vgl. G. GRASS: Langsamer Walzer. In: Meine grüne Wiese. Hamburg 1992. S.83ff..

もベルたちとともにテロの「シンパ」に数えられた。しかし、彼自身のテロに対する答えは、「いかなる暴力にも反対だ」<sup>(25)</sup> という発言に尽きていよう。

「プラハの春」については彼は民主的な社会主義の試みとして高く評価していた。従って、68年にこれがワルシャワ条約軍の戦車に踏みにじられた時には当然抗議するが、他方、西側のそれへの対応も非難している。バーゼル開催の「チェコスロバキア1968」という催しでは「プラハのレッスン」という講演をする。<sup>(26)</sup> それによると、この民主的社会主義の試みにヨーロッパの左翼インテリらは喝采したにもかかわらず、チェコスロバキアの新左翼を認め、支援することを怠ったという。学生たちの模範はチェ・ゲバラで、ハヴェルではなかったことにグラスは西側の左翼運動の偏向をも感じとっていた。

この間に、グラスは地方レベルの選挙での応援も行う。67年にはシュレースヴィヒ=ホルシュタイン州の「牛乳補助金」制度について論じている。<sup>(27)</sup> 彼によると、この補助金はCDUの農業政策上の失政であるが、これが時の権力者の選挙戦用にいまだに悪用されているという。そして、いわゆる「再統一信仰」が壁から小石ひとつ動かさなかったと同様に、補助金信仰はバターの山を少しも動かすことはないとする。かつて騎士十字勲章が知らないうちに兵士たちを組織的犯罪に貢献させたと同様、補助金制度は選挙民の無知による「間違った伝統保護」であるとすらいう。

69年の連邦議会選挙にも彼は選挙応援の旅に出る。選挙民イニシアティヴという市民による自発的なSPD支援組織を各地に発足させ、ブランド政権樹立をバックアップする。ただ、このイニシアティヴ発足にあたって、グラスが六〇年代までデモクラシーは上から秩序づけられ、下から要請されることはほとんどなかったという認識を抱いていたことには、特に留意すべきであろう。(ちなみにこれは底辺民主主義を実践するその後の平和運動や反核運動などのさきがけとなったといえよう。) この記録が『蝸牛の日記から』である。そこではまだ、進歩を「蝸牛」になぞらえ、漸次的な民主主義の変革へ希望をこめていた。

こうした現実主義は彼に、その後ブランド政権のブレーンとしての体制内での役割を選ばせる。当時のブランドについては、「追いやられた再統一の目標

---

(25) G. GRASS: Im Ausland geschätzt – im Inland gehaßt. In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.206ff..

(26) G. GRASS: Die Prager Lektion. ebd., S.312. ff..

(27) G. GRASS: Rede von der Wut über den verlorenen Milchpfenning. In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S.213ff..

を、ふたたびわれわれの視野に押し入れる外交イニシアティブを発展させられる唯一の政治家」<sup>(28)</sup>と述べられる。実際、グラスは東方外交に参加し、有名なブランドのポーランド訪問に随行した一人でもあった。東西接近の前提はポーランド西側国境の承認であるというのが、彼の基本的な考え方のひとつだったからである。<sup>(29)</sup>

ただ、かといってグラスはSPDを固定的に絶対化して見ていたわけではない。このことは続く七〇年代・八〇年代に明白となる。社民主義はドグマではない、SPDはむしろ、彼にとっては現実政治の中で議会制民主主義を実質あるものとするための必要悪である。SPDに「批判的シンパシー」を示すことこそを自らの使命と任じ、党が政権をとり体制側となってからも、党には懷疑を通じた異質なものの寛容と理性的態度を訴える。選挙で政治家に四年間の委託を行うというだけのものではなく、政治は日常的に下からの働きかけを待って初めて実質あるものとなる、とグラスは考える。長くSPD黨員にならなかったことは、<sup>(30)</sup>彼の政治参加が素人の口出しと非難される要因ともなったが、これは批判的態度を保持するためには必要なことであった。<sup>(31)</sup>むろん、ベルリン市長とか連邦議会議員、イスラエル大使にという話も本人は固辞し続けた。

では、なぜ作家である彼がここまでアンガージュマンをしなくてはならないのだろうか。彼によると、それはひとつには、出版社・マスコミが両ドイツで既存の政治を根本的に問い直す機能を失っているからだという。その時、作家は自らの仕事ではないにせよ、その代わりをやらざるをえない。例えば、チェコスロバキアの文学者ハヴェルはチェコ事件以来、世論の批判的精神の枯渇を憂慮して自ら雑誌を創刊したといわれている。<sup>(32)</sup>一方、西ドイツでは六〇年代来、扇動的で大衆の意識操作を行っているといわれてきたシュプリンガー・コンツェルンの存在は、グラスがあえてジャーナリストの代わりをする十分な根拠たりえたであろう。

(28) G. GRASS: Es steht zur Wahl. In: Über das Selbstverständliche. ebd., S.26.

(29) それゆえ、後のドイツ再統一の時ヴァイゲルがこの国境のことをまたもち出したことに、グラスは憤激する。(Vgl. G. GRASS: Scham und Schande. In: Gegen die verstreichende Zeit. ebd., S.12.)

(30) 1983年に入党。

(31) これにはまた、彼が黨員になることで政治的偏向を恐れる出版者のことを配慮したという見方もある。

(32) G. GRASS: Phantasie als Existenznotwendigkeit (mit Siegfried Lenz). In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.255ff..

1974年からのシュミット政権に対しても「批判的シンパシー」という形で折にふれて建設的な意見を述べる。テロの激化に対抗するために作られた過激派条例は、異なった考え方を持つ若者に公職の道を閉ざすことで、若者を従順で日和見主義的にしてしまう。そして、これが潜在的な暴力の温床ともなりかねないゆえに、グラスはその撤回を求める。(ブランドがこの件での自らの過ちを後に認めた際には、グラスは過ちを認められることは政治家の能力の証であるとしている。<sup>(33)</sup>) デモクラシーの危機ということではまた、NPDの問題もあるが、グラスの考えでは、NPDは非合法化すべきではない。<sup>(34)</sup> 彼はNPDを黙殺するのではなく、それに対抗する勢力を結集する努力をすべきだという。ここでも安全保証の名のもとで言論の自由が抑圧されていくことと左翼反対勢力の弱体化への懸念がうかがえる。

シュミット個人については政治的力量は評価するが、自らも知識人なるがゆえに、ブランドのように文化人・知識人に助言を求めるという態度をみせなかったことに、グラスは失望を覚える。シュミットはブランドやハイネマンと違って、知識人に政治的現実へ興味を向けさせる仲介者的能力を欠く、というのである。<sup>(35)</sup>

七〇年代はブランド退陣と呼応するように、それまでの盛んな政治参加から身をひき、ふたたび彼が創作に専念する時期とみられる。しかし、確かに選挙運動は目立たなくなるが、政治について発言する機会はやはりのがさず彼は利用している。そればかりか、公にする理念を自ら実践していく試みもみられる。例えば、自分の出版社で作家も含めた共同決定モデルの組織化を試みたりしている。それとともにアジア・アメリカ旅行を通して、徐々に関心が第三世界・南北問題へと移り始める。八〇年代にみられるよりグローバルでラジカルな問題との取り組みは、実はこの頃から準備されていたのである。

79年のソ連軍のアフガン進攻に続き、八〇年代には中米紛争、イランのアメリカ大使館人質事件、西独へのパーシングII配備決定等によって、ふたたび国際情勢は緊迫化する。グラスは一連の動きの背後に超大国、特にアメリカ合衆国の影をみる。西ドイツは西側同盟の中でアメリカに追随するのではなく、む

---

(33) G. GRASS: Von morgens bis abends mit dem deutschen pädagogischen Wahn konfrontiert. ebd., S.254.

(34) G. GRASS: Rede an einen jungen Wähler, der sich versucht fühlt, die NPD zu wählen. ebd., S.118.

(35) G. GRASS: In Ausland geschätzt — im Inland gehaßt. ebd., S.212.

しろアメリカの行き過ぎを批判することで、この同盟に忠誠を示すべきだという。そして、過去において二度の世界大戦をひきおこした責任ゆえにドイツは率先して軍縮を行い、そこから生じる余剰で第三世界援助と研究助成を行うべきだと主張する。従って、イランに対する経済制裁やオリンピック不参加には反対を表明する。特にイラン問題では、これを南北問題としても考え、異なる文化・歴史を持つイランを侮辱し、人質といった手段をとらざるをえなくなるほど追いつめるべきではないとした。これについては、ベルリン在住の作家連署で連邦議会へシュミットあてに声明書を出してもいる。<sup>(36)</sup>(ちなみに、後の湾岸戦争に際しては、国連を軍事的解決を早まったとして批判し、ここでは経済制裁によって長期的な政治的手段の解決を目指すべきだったとする。また、湾岸戦争賛成を表明したエンツェンスベルガーやビーアマンへの批判もなされている。<sup>(37)</sup> グルッペ47以来のつきあいのエンツェンスベルガーにはグラスは「鋭い頭脳の持ち主」と敬意を示すが、彼のフセインとヒトラーとを並べる論じ方は的はずれだという。この戦争ではイラクへの西側からの武器供与にみられるように敵一味方で割り切れる単純構図はなり立たず、むしろここには先進国のエゴと第三世界への配慮のなさばかりが目につくとグラスは指摘する。)

パーシングII西ドイツ配備決定については、ハイルブロン会議('83)で共同声明を出し抵抗を呼びかける。<sup>(38)</sup> ここでは抵抗はあくまで非暴力的になされるべきであり、それには不従順ということも含まれると述べる。そして、先制攻撃能力を持ち、今や違憲の疑いがある国防軍への兵役拒否を、グラスらは自分の息子やその友達にもすすめるつもりだという。また、もし平和をより確かにしたければ、ロケットを配備するのではなく、DDRと環境保護条約を結ぶべきだとも付け加える。

この間、グラスはインドに滞在したり、ドイツ国境近隣の森をまわり、チェルノブイリに象徴的な地球環境の危機的状況と人類の自己滅亡の危機を体感する。後にこの時の経験から、「皆伐において、東西ドイツはすでに統一されていた」とか、「皆伐は人間の頭の中で起きている」<sup>(39)</sup>とも述べる。この頃の作品も

(36) G. GRASS: Vier deutsche Schriftsteller, die in Berlin leben, rufen zum Frieden auf. In: Widerstand lernen. Darmstadt 1984. S.13ff..

(37) G. GRASS: Diese Regierung muß zurücktreten. In: Gegen die verstreichende Zeit. ebd., S.121.

(38) G. GRASS: Verweigert Euch! Aufruf der an der Heilbronner Begegnung beteiligten Schriftsteller. In: Widerstand lernen. ebd., S.97ff..

(39) G. GRASS: Bitterfelder Rede. In: Gegen die verstreichende Zeit. ebd., S.161.

また、グラスのエコロジー的関心がドイツという国境を越えていることを示唆している。「例えばカルカッタ」<sup>(40)</sup> というエッセイでは自らのカルカッタでの半年間の滞在について報告し、南からのヨーロッパへの難民流入は避けられないとする。そして、むしろこれからの我々はそうした変化への心づもりをすべきだと訴える。「カルカッタ」は対岸の火事などではなく、今に国境を越えてドイツの玄関先にまでやってくるだろう。それは悲惨ではあるが、ヨーロッパ的範疇では促えきれない悲惨さである。こうした従来のヨーロッパ的枠組みでは促えきれない現象に、この頃の彼はあえて目を向けようとするのである。

小説『頭脳出産』<sup>(41)</sup> ('80) は当時のドイツの出生率低下という問題と絡めて「ドイツ人が死滅する」というサブタイトルが付けられているが、これは東南アジア旅行をするドイツ人教師夫婦の、核の脅威のあるこの世界で子供を作るべきかどうかという葛藤を通して、ヨーロッパに迫る危機を外からの視点で描こうとする小説である。そこではまた、ドイツ人の人口減少は外国人のドイツ化によって解消され、異質なものによる多様化のプロセスを経て新しいドイツが生まれるだろうとも述べられる。こうした考え方はまた、92年の難民規制によるドイツの内向化に対する彼の態度を予示していたといえよう。

八〇年代のグラスについては、『女ねずみ』などの作品に人類滅亡のペシミズムを見、諦念を抱くようになったとする評もあるが、<sup>(42)</sup> この頃の彼はむしろ、自らも言うように、より「ラジカルにアナーキーに」<sup>(43)</sup> なったというべきであろう。私の理解できる限りでは、それは次のような点にみられる。(84年の政治評論集『抵抗を学ぶ』から)

- 冷戦下の安全保障に対する根本的疑問。(連邦議会あての声明書では、中距離ミサイル配備はもはや抑止力にならない、安全保障の優先のために市民は禁治産宣言を受けているとする。)
- 歴史への反省から帰結される抵抗の必然性の認識。(ヒトラー政権奪取五十周年講演では、中距離ミサイル配備を1933年のヒトラー政権奪取と同列にみる。ヒトラー政権は彼自身の強さからではなく、対抗する側の弱さゆえであると

(40) ギュンター・グラス「例えばカルカッタ」高本研一訳、朝日新聞、1990年1月4日。(1989年のローマ・クラブでの講演草稿)

(41) Günter GRASS: Kopfgeburten oder Die Deutschen sterben aus. Darmstadt 1984.

(42) Vgl. Daniela HERMES: Weil dieses vergeblich anmutende Steinewälzen zum Menschen gehört. In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S.936ff..

(43) G. GRASS, H. ROSENBAUER, U. WIEKERT: Trommler und Schnecke. Ein Fernsehgespräch. In: Auskunft für Leser. ebd., S.45.

し、同じことが NATO 追従の政府方針についてもあてはまるという。すなわち、例えば、労働組合のゼネストの怠慢、赤に対する不安という口実、SPD の抵抗の怠慢、教会の機能停止などがヒトラー政権を可能にしたというのである。）

- 進歩についての見直し（SPD 党大会での「ゴードスベルク綱領修正」議論では、社民主義を特徴づけるのは死のようなまじめさではなく、笑いを恐れず自らを疑問にする「フモール」だとする。こうした観点から、グラスはいまだに成長主義的であったゴードスベルク綱領自体の見直しを支持する。その際、根本的な見直し点として、労働と環境の対立を挙げ、進歩が自然の搾取に帰結する経済・政治決定に対し、これからは自然とより宥和的になるように、進歩へエコロジ的保留を付けるべきとする。それとともに公務員制度の見直し、南北問題などでもラジカルな決定が不可欠だという。）
- 未来の自明性への懷疑。（いくつかの作家会議声明では、人類の終末の脅威がイメージできるようになったとして、文学は今や未来に知己を待つことはできないとする。人間は自然環境ばかりか自らとその未来をも搾取している、その結果、進歩の奴隷と化しているという。しかし、その一方で、人間には自らの終わりをイメージする力があるのだから、今からでも根本的な考え方の転換が可能だとも述べる。）
- 徹底した非暴力主義。（中米旅行後の講演ではニカラグアの革命家の言葉「革命とは復讐の断念だ」に新しい抵抗の姿勢を見る。また、83年のハイルブロン会議では「息子たちやその友達に兵役を拒否するようすすめる」と言っているが、このような意識的に規則違反を呼びかけることは今までにはなかったとの指摘もある。<sup>(44)</sup>)

以上のような変化は最近のグラスの言動にも当然反映されていく。

89年の「壁」撤去とその後急ピッチに進む再統一への動向については、敬愛するブランドですら、これを手離して喜んだ。しかし、グラスはこれを市民による「無血革命」と評価はするが、それはあくまで東の人々の民主的成熟に負うものであり、なんら民主主義的試練も受けることのなかった西側の人々が資本主義の勝利と言いたてる権利はないとする。そして、真の革命家たちを置き去りにして、西側の指導者主導で上からの統一を急ぐことに懸念を抱く。この統一は市民の中からの民主的要求を待って行うべきだったのが、そのプロセスを間違えている。グラスはそれゆえ、この統一に反対の立場をとる。この議論

(44) Claus-Ulrich BIELEFELD: Ein Pragmatiker radikalisiert sich. ebd., S.251ff..



の根底にはまた、戦争責任の負担が東西でアンバランスだったという認識がある。東の方にはマーシャル・プランもなく、社会主義統一党の一党独裁による官僚主義機構のもと、第三帝国の重荷を大部分負わされてきた。それゆえ、西は今こそ東を援助し、この負担を調整しなくてはならない、というのである。

東西ドイツ統合の過程でグラスがもっとも懸念するのは、東の人々の負担が軽減されるかどうかということである。従って、性急な統一が東にこれまで以上の負担を強いるのは目に見えているので、この統一は認められない。そればかりか、「ドイツ統一」は過去の悪夢であり、ありえぬ統一を強制するところに歴史の悲劇も起きたのだからなおさらだ、と彼は言う。「ドイツ」とはもともと統一体ではなかった。実際、歴史的に見れば東西ドイツの分裂より南北ドイツの分裂の方がより深刻なくらいである。バイエルンとシュレースヴィヒ＝ホルシュタインとの南北対立は、メクレンブルクとニーダーザクセンとのイデオロギー的対立よりも根が深いのである。<sup>(45)</sup> 67年の講演「対話する複数」では「ドイツの再統一はいつも分離の承認を前提とする！」<sup>(46)</sup> というバーリングの論文が引用される。ここではグラスは、それをもとにドイツとはもともと分離主義であったが、自らの自明性の欠如ゆえに統一国家の願望が空白を生むとかえって国家主義へと極端に振れることがあると述べる。また、時のキージナー政権がこうした議論を無視して再統一を口にするのはそれ故無責任であるとさえいう。むしろ、統合はこうした歴史的・文化的背景も踏まえてドイツ的多様性を生かす形態が望ましい。グラスがヘルダーの考えをもとに、同じ文化を基盤にした「文化国家」という理念を持ち出し、二つの国家のゆるやかな統合形態としての「国家連合」を提唱する根底には、こうした歴史的・文化的側面への配慮があったことも見逃すべきではない。(ただ、ここで統一国家がナチスを生んだという考え方は短絡的であるという批判もあるし、グラスのいう現行のDDRとの文化交流という面では文化がDDRではイデオロギーの一部であるという局面を認識していなくてはならないという懸念もあった。また、「国家連合」構想自体、DDRの理念としては実質上失敗していたものであるという指摘もある。<sup>(47)</sup>)

---

(45) G. GRASS: Die kommunizierende Mehrzahl. In: Über das Selbstverständliche. ebd., S.191ff..

(46) ebd., S.203.

(47) Vgl. Gerd LABROISSE: Günter Grass' Konzept eines zweiteiligen Deutschlands. In: Ein Europäischer Autor. ebd., S.291ff..

このように、「国家連合」にみられるドイツの多様性の主張と従来の国家概念を超えようとする考え方は、壁崩壊以前からすでにグラス固有のものであったといえる。

確かに、場所の刻印を押され、いやというほど痛めつけられはしたが、芸術ならびに詩人と画家は場所にとらわれないままだったし、それゆえに情熱的に壁を跳ぶ人だったのです。彼らには後からいかなる境界もひくことはできません。<sup>(48)</sup>

壁に分断されるドイツを目の前にし、現実の政治では超えがたいこの境界を、グラスはこうした文学者・芸術家としての立場から、無意味化していこうとした。むしろ、これは当時の SPD の外交政策に沿うものであるともいえる。この東方政策の帰結はかつての東部地域の断念であり、グラスには故郷の喪失を意味したのであるが、一方、この現実政治における喪失を埋め合わせる可能性を彼は文化（文学）に見ていたのである。<sup>(49)</sup> 従って、彼にとっては共通の文化的伝統を拠り所に文化レベルで東西交流を推進することが来るべきドイツ統合を準備するはずだった。

グラスはこのように文学・文化一般により普遍的なドイツ性を見、それに政治的意味での「国家」の概念の補償的役割を求めている。しかし他方では、こうした考え方が西側の経済力に希望を見、統一に浮かれた近年のドイツ国内において、社会のコンセンサスをかき乱すものとして、彼を孤立させたとしても不思議はない。「祖国を忘れた輩」という90年の講演では、グラスは自分に対するそうした批判・攻撃のエピソードを紹介している。<sup>(50)</sup> それによると、89年にハンブルク中央駅に降りたったこの作家は、ある若い男に「売国奴」と呼びかけられたという。また、同年の「列車は出発してしまった」という講演では、マスコミが同調して、統一過程についての異論を締め出す傾向がみられたが、彼に対してもこの「祖国を忘れた輩」の講演草稿の掲載が「シュピーゲル」誌に拒否されたという。<sup>(51)</sup>

グラスは当初はまだある程度は SPD の主張と軌を一にしていたが、統一後の難民問題で外国人排斥運動が高まり、極右勢力が台頭し、やがて SPD が難民

(48) G. GRASS: Sich ein Bild machen, In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S.829.

(49) Vgl. G. GRASS: Rede vom Verlust. ebd.

(50) G. GRASS: Kurze Rede eines vaterlandslosen Gesellen. In: Gegen die verstreichende Zeit. ebd., S.35ff..

(51) G. GRASS: Der Zug ist abgefahren – aber wohin? ebd., S.74ff..

規制を持ち出すに及んで、これとたもとを分かť。とはいえ、党を出てからも彼はあくまで社会民主主義者であると明言しているのではあるが。『損失についての講演』では、かつてナチスに終われ政治亡命した人すべて（その中にはノルウェー・スウェーデンに亡命したブランドも含まれる）までも、この規制は裏切ることになると述べられる。

我々の憲法に名誉を与える亡命の基本的権利を、次回に付帯条項で制限するつもりの方社会民主党の連邦議員は誰であれ、そうすることで、それが死んだりまだ生存しているすべての移民に遡及していくことを知らなくてはなりません。彼らはドイツを離れざるをえなくなり、スカンジナビアやメキシコ、オランダ、イギリス、アメリカ合衆国に逃避所を見つけなくてはならなかったのですから。<sup>(52)</sup>

こうした態度の背景にもドイツを多様性の中で促え直そうとするグラスの考え方がうかがえる。もはや従来の国家という枠で「ドイツ」を促える時代ではないという考えは、全体主義という悪夢と自らの難民としてのおいたち、第三世界での実際の生活体験に裏打ちされている。これについては、故郷の喪失が場所を変えることを喜びとさせ、異質なものに好奇心を抱かせた、故郷喪失者には地平線はより広いのだ、とも述べられる。<sup>(53)</sup> ドイツは異文化との混淆の中で自ら変容しつつ豊かになっていくだろう。グラスの再統一反対、外国人規制反対は、この多様性擁護という点では以前の考え方から一貫性を有する。ただ、最近のグラスはこうした考えの受け皿となるはずの既存の政党の限界を痛感するようにもなっていた。

90年になると、緑の党・同盟'90の大会に出席するなどして、ここ数年は緑の党に接近している。<sup>(54)</sup> 八〇年代前半まではベルのように緑の党支持を打ち出すことなく、あくまで議会を通しての変化を実現するのはSPDであるとみていた。しかし、既成政党の枠にとらわれず、従来の生活様式を批判していく多様な市民運動のゆるやかな結合体の活動にこそ、グラスの考え方は近かったし、近年東西から南北へと問題意識の比重が移ってきたことも要因となって、最近の彼は緑の党に傾倒していると考えられる。「オゾンホールはドイツの接近で小さくなることはない」と、とにかく見過ごされがちな問題に警告を発したことも

(52) G. GRASS: Rede vom Verlust. ebd., S.26f.

(53) ebd., S.42.

(54) Vgl. F. GIROUD, G. GRASS: Wenn wir von Europa sprechen. Frankfurt a.M. 1989.

ある。<sup>(55)</sup> これも八〇年代にまた原点に戻り「ラジカルにアナーキーに」なったグラスの当然の帰結といえる。

全体として、グラスの政治的・社会的言動は、統一問題における発言などにみられるように安易に画一化し、同調しやすい世論・風潮への批判である。また、それは政治の現実のあり方を根本的に問い直すこともしないジャーナリスト・出版関係者の代わりの批判であり、そこではより多様で豊かな社会を目指して、立ちどまって考える時間を作り出すこととデモクラシーが市民の中から成熟することが目標とされていたようである。マスコミ・知識人の意見の「平淡化」<sup>(56)</sup>、政治・社会の画一化への動きは批判・抵抗が弱体化している証とみるところには、グラスなりの現状認識がある。この批判性は長年支持してきたSPDですら容赦しなかった。この意味において、グラスは今まさに、「徹底した民主主義者」<sup>(57)</sup> であるともいえる。

### 第三章 「歴史の埋め役」

このように、作家グラスの活動を政治・社会情勢を絡めて概観してみると、「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」という命題に対する自分なりの反論の試みが彼の作家活動だったという意味が見えてくるだろう。<sup>(58)</sup> 五〇年代の文学界・思想界では、反ナチの表現と称し第三帝国を描き、自分たちは悪魔にそそのかされていたのだとか、心の中では反対だったとか、民族大虐殺について歴史上にパラレルな例を探し、ドイツ人だけが責められるべきではないといったことが主張されていた。そのことへの批判として、また、現代にこそ見られるおかしい響きであるビーダーマイヤー的な過去との関わりへの抵抗として、彼の文学は始まったといってもよい。現実世界ではこうした「アウシュヴィッツ」という過去は抹消され、忘れられようとする方向に動いて

(55) G. GRASS: Viel Gefühl, wenig Bewußsein. In: Gegen die verstreichende Zeit. ebd., S.18.

(56) G. GRASS: Ein Schnäppchen namens DDR. ebd., S.112.

(57) Vgl. G. GRASS: Den Widerstand lernen, ihn leisten und zu ihm auffordern. In: Widerstand lernen. ebd., S.96. (「我々に欠けているのは新しい武器やもっとたくさんの核弾頭ではありません。我々に欠けているのは、連邦共和国憲法を守り、そればかりか、我々の憲法統治者たちの頭の弱さから守る徹底した民主主義者なのです。」)

(58) G. GRASS: Schreiben nach Auschwitz. ebd., S.42ff..

いる。歴史とは権力者たちに都合のよいように書き換えられがちなものだ。だとすると、当然、ドイツの指導者にはこの「アウシュヴィッツ」という自分たちの過去は具合が悪かったはずである。また、過去はすでに精算されたとして新たな出発を遂げようとする戦後の風潮には明らかに自己偽瞞があったが、当時の冷戦構造がそれを許容し固定化した。こうして西ドイツは、過去の分析を通して歴史から利益を得ることなく、自由主義体制の中に組み入れられることになった。グラスはこの五〇年代をペテンの時代とみる。アデナウアー＝ウルブリヒトは偽造の巨匠だ、と。そして、こうした歴史の偽造については86年の小説『女ねずみ』もテーマとして扱う。

この小説には、『ブリキの太鼓』の主人公オスカル・マツェラートが再登場する。グラスによると、オスカルを登場させる意図は当初なかったが、書いているうちにオスカル自身が登場の名乗りをあげてきたという。そして、作品の中でも作家の意志に逆らって自らの六十歳の誕生日を祝ったり、物語の終末をもっと宥和的にするようにと主張したりしたという。つまり、オスカルを生んだ五〇年代が八〇年代の今現在と決して無関係ではないというわけである。

そう、これ（；戦後全体での欺瞞やペテンはアデナウアー、ウルブリヒト、マルスカートに代表される五〇年代にあったこと）が、オスカル・マツェラートがこの本に出てくる付随的な理由です。五〇年代の典型的産物たる彼には八〇年代に自らの時間がふたたびやってくるように思われました。彼は長い間追いやられ忘れられていたみたいでしたが、突然またここにいます。八〇年代になって初めて私たちは五〇年代からの帰結である誤った決定に向き合わされている。(…) 二人（；アデナウアーとウルブリヒト）のそれぞれの大偽造である二つのドイツ国、それぞれの戦勝国側へのこうした潜り込み、もうひとつのドイツに対する約束のこうした不履行、こうしたことは今日まで続いていて、武器を構えてお互い向き合っているのです。<sup>(59)</sup>

これによると、五〇年代の政治の帰結が今八〇年代のこの東西対立緊張なのだという認識ゆえに、この小説はあえて五〇年代にこだわらざるをえなくなっているといえる。これも戦後を語るには「アウシュヴィッツ」を無視しえないという論理の延長線上にある。

グラスはその際、いわゆる「歴史 (Historie)」の見方に対して、失われたものにこだわる。記述されずその時々の権力によって隠蔽された歴史事象がある

---

(59) G. GRASS: Mir träumte, ich mußte Abschied nehmen. In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.358f..

が、それは大文字の歴史の間隙で表現者を探している。そしてそれに聞き耳をたてる者が作家なのである。それら失われたものたちの歴史 (Geschichte) は、いわゆる「歴史」への単純化への抵抗となる。文学による反・歴史 (反・現実) の提示が、かえって「歴史」のニュアンスを豊かにする。そして、それが自ずと社会批判ともなる。別の歴史の提示は時の権力者たちの拠り所を否定、または相対化しうるからである。他方、専制社会は別の現実、フィクションの現実を認めない。そこでは作家は沈黙せざるをえなくなる。従って、仮にも民主的であろうとする社会においては作家はいわゆる「裏の歴史」<sup>(60)</sup> を書くことで、兆し始めた専制的風潮に対抗しなくてはならない、とグラスは考えているようである。

例えば、歴史への女性の貢献は無視しえないのに、「歴史」には男性のことばかりである。それは男によって書かれたゆえに女は無視されてきたためと考えられる。そして、この名もない女 (料理女) たちを正当に歴史の中に組み入れる試みが小説『ひらめ』のひとつのモチーフともなった。

(料理女) レナ・シュトゥッベは初期社会主義労働組合にとってなくてはならない、たとえその名前はどこにも記されていないとも、いかなる通りもいかなる広場も彼女にちなんで名付けられることがなかったとしても。<sup>(61)</sup>

ここでは正統派の歴史に対して、忘れられ、抹消されてきた歴史を拾い上げるのが作家の使命と考えられているといえる。さらに『ひらめ』では、グリムの童話「漁師とその妻」に、実はもうひとつのヴァージョンがあったと指摘されている。それによると、妻ではなく、夫の方が強欲で、最後に神様になりたがったあげくに 元のあばら屋に戻されたのだという。しかし、『ひらめ』の作者によると、これも従来のグリムの稿も二つとも正しくはない。むしろ、両方があって初めて真実なのである。第二の稿は収集したグリムが男だったために、当時それを採用することが躊躇された。だが、そもそも歴史とは、このように恣意的に取り扱われる可能性を秘めているものなのではないか。そしてひとつの「歴史」を絶対視することはある歴史観、ある立場への絶対化につながりかねない。従って、作家に歴史家やマスコミのやらないことをする可能性があるとするれば、それはこうした絶対化・画一化に抵抗すべく別の歴史を提示するこ

(60) Vgl. G. GRASS: Als Schriftsteller immer auch Zeitgenosse. In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S.928.

(61) G. GRASS: Der Butt. Darmstadt 1988. S.478.

とであるともいえる。<sup>(62)</sup>

また例えば、マスコミに限って言えば、それが伝える事件を我々はいかに受け止め、実感できるものとすればよいのだろうか？ 客観報道といわれるものが、世間一般の人々にとって、抽象的であり、他の事象との関連性が分断されていて、それゆえいかに関心の持てぬものとなっていることか。そして、それが結局は一般の人々の歴史への無関心を助長していく。マスコミの限界はここにあるのかもしれない。グラスの短編「ビキニ環礁」<sup>(63)</sup>はこのことをテーマにする。1946年6月12日、ラジオで水爆実験のことを聞いた農夫マティアス・テルネは、コンパスを持って畑に出てビキニの方を見る。しかしその方角にはラジオが報じたものはなにも見えない。がっかりした彼はそこで二度と振り返ることなく家に帰ってしまうことになる。この話には、世界のどこかで起きていることを自分で確かめることの困難さが表現されている。また、それと同時にそこには世界の出来事に無関心でいたためにはどうすればよいのか、という疑問が苦々しく残されてもいく。

過去においていわゆる「歴史」の中で失われたものを、特に失われた故郷ダンツィヒを、文学で取り戻そうとすることがグラスの創作モチーフでもあった。<sup>(64)</sup> すなわち、それは失われたもの、犠牲者たちの立場に立って歴史を見るという意味である。「歴史」とは勝者たちの歴史だ。それに対して、文学には敗北があらかじめ定められているとするヘミングウェイの言を待つまでもなく、敗北の歴史を描くことは文学の領域である。「歴史」の間隙を埋めること、作家が表現しなければ決して歴史の上に現れることのないものを描き出すこと、それがグラスのいう「歴史の埋め役」<sup>(65)</sup>としての作家の仕事なのである。

最新作『鈴蛙の呼び声』<sup>(66)</sup>、では、主人公の大学教授が語り手である学友の「私」に資料を送りつけて、自分のポーランドにおけるドイツ人のための墓地事

(62) また、『ひらめ』には「じゃがいもの導入は、七年戦争より重要なことだった」として、人類の「食」の歴史を書く意図もあった。(Vgl. G. G.: Die Kartoffel war wichtiger als der Siebenjährige Krieg. In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.190ff..)

(63) G. GRASS: Bikini Atoll. In: Meine grüne Wiese. ebd., S.60.

(64) Vgl. G. GRASS: Rede vom Verlust. ebd.

(65) G. GRASS: Als Schriftsteller immer auch Zeitgenosse. ebd., S.923. (「作家は内職するように、公的な歴史の埋め役として雇われているのだろうか。歴史のプロセスの中で、横柄に、そしてまた尊大にとびこえられるものを作家は埋める、(…)」)

(66) G. GRASS: Unkenrufe. Göttingen 1992.

業の顛末を記録してくれるように依頼する。その墓地事業はドイツ統一後のグダニスクにドイツ人のための墓地を作ろうというもので、ドイツとポーランドとの宥和事業の一環とされていた。しかし、統一後の混乱で旧西ドイツからのこの事業への参加者が増え、事業は次第に営利追求の側面を強め、本来の「宥和」の理念が薄れていく。そこでとうとう、発起人の主人公の老カップルがそれへの抗議の形でこの事業から身をひいてしまう。その間、統一によって東側に入ってくる経済原理をめぐる東西の考え方の相違、歴史の扱い方の世代間のギャップ、少数民族や移民などの微妙な帰属問題、文化的差異など統一に伴う複雑な問題が表面化してくる。この作品は、いわば、こうした歴史の混沌とした流れの中で埋もれていきそうになる老カップルの「歴史」をすくい上げるひとつの試みとして、失われたものたちにレクイエムを奏でている。

こうしたことは、作家との関連ではこういう風にも言われていた、

彼（；作家）は裏側を光のもとに持ち出そうとする。彼は逃走用靴の中をひっかき回し、権力者のクソをつつつき回す。いかなる死体も彼にとって十分高貴であるわけにはいかない（…）<sup>(67)</sup>

またここに、グラスが後にダンツィヒ三部作の創作モチーフについて振り返っている発言を並べてみると、歴史の埋め役としての作家の使命がより鮮明になるはずである。

三つの散文作品——『ブリキの太鼓』『猫とねずみ』『犬の年』——において、私はあるひとつの時代の全体的現実を、その小市民的な偏狭さに含まれる矛盾や不条理と、その超次元的犯罪とともに、文学の形式で表現しようとした。作家の生の材料としての現実性は分けることはできません。そうしたものを取り込み、その影の部分をも省いたりしない者だけが作家と呼ばれるに値するのです。<sup>(68)</sup>

「歴史の埋め役」としての作家にとっては、このように文学は歴史叙述、マスコミ報道だけでは伝えきれない「影の部分」をも省いたりせず表現できるメディアである。つまり、一方を悪、他方を善として世界を二分割してものごとを捉

(67) G. GRASS: Als Schriftsteller immer auch Zeitgenosse. ebd., S.923.

(68) G. GRASS: Nicht nur in eigener Sache. ebd., S.318. (いわゆる「グラス-ツィーゼル」裁判で、クルト・ツィーゼルがグラスを「言語横断なポルノ作品の作家」であり、「カトリック教会の中傷者」と呼んだことに対するグラスの説明。1968年。)



え、解釈のためと称してかえって現実の別の側面を排除していくのではなくて、むしろ現実の矛盾・葛藤を積極的に取り込む「灰色のニュアンス」を持つメディアが文学なのである。グラスはそれについては「文学は多様な意味、二重底、さまざまな解釈を許すことで生きています。このことはまず第一に尊重されねばなりません。」<sup>(69)</sup>とも述べる。

「子供たちにそれをどのように言うのか？」<sup>(70)</sup>という講演でも、同種の考え方が示されている。そこでは、テレビドラマ・シリーズ「ホロコースト」(79年放映)が大きな反響を呼んだ時のことが話題とされる。グラスは、それをアウシュヴィッツの後三十五年目でマスメディアが勝利を祝っていると述べ、戦争犯罪の獣性を伝えるテレビの大衆啓蒙の力を認める。しかし、そのテレビは幅広い影響力と視聴率だけに関心があり、こうした月並みな啓蒙の結果は表面的なものにすぎないともいう。この犯罪の責任の多層性、民族虐殺の複雑な現代性はほとんどテレビは示しえない。責任がないといってもよい無知の中で分かれた責任、ただ見ているだけで自分の手を汚すことのなかった同調者たちの責任、特にシナゴーク放火の時なにもせず共犯となった両キリスト教会の罪は、コンパクトで感動的に恐怖を見せかけるテレビの筋には入りえない。それに対して、書物の方は、この戦争について、こうした多層性、複雑さ、微妙さ、現代性を文学的に表現するという。

また、「慣れについての講演」<sup>(71)</sup>では、歴史的事実がいわゆる「歴史」となる際の抽象化操作（；死者を死者数として促える）が、現実世界に対する無批判性を生み出すとも述べていた。ところで、こうしたグラスの抽象化への懐疑の原点は、終戦直後のアメリカ軍捕虜収容所にまで逆のぼると考えられる。ナチスが、自分たちドイツ人がこの戦争でユダヤ人を虐殺したということをどうしても信じられない青年グラスは、それをアメリカ軍のでっちあげとすら思うが、ニュルンベルク裁判でかつての青少年指導者が自らの罪を認めるのをラジオで聞いて、初めてこの事実を受け入れる。そして、KZの写真や遺留品を見せられ、それらの「もの」の、*„Gegenständlichkeit“*に圧倒される。それらは決して言葉で抽象化されないものだと感じる。そしてまた、こうした「もの」から、

(69) G. GRASS: Von morgens bis abends mit dem deutschen pädagogischen Wahn konfrontiert. ebd., S.244.

(70) G. GRASS: Wie sagen wir es den Kindern? In: Werkausgabe Bd. IX. ebd., S. 755ff..

(71) G. GRASS: Rede von der Gewöhnung. In: Über das Selbstverständliche. ebd., S.162ff..

その後の彼は過去を解釈するのではなく、「文学的」に提示することへの挑発を受けとったと言ってもよいかもしれない。

歴史へのこだわりはグラスにとってはこのように自明なのだが、かつてブラント政権成立前後の社会風潮として「歴史離れ」が言われたことがあった。グラスはこの現象についても問題にしたことがある。

私が「成人式の演説」やそのほかの所で示したことは、より若い世代に見られる歴史離れ (Geschichtslosigkeit)、あるいは歴史からの逃走の傾向です。<sup>(72)</sup>

ここでいう若者の歴史離れとは、ひとつは大連立後の彼らの議会制民主主義への絶望と、非常事態法の成立と過激派のテロに苦慮した末の過激派条例立案への方向が、若者には管理主義的に映り、彼らに刹那的な物質主義的快楽への傾向を生じさせたということを指す。しかし、若者のこの内向化は過去を振り返り、その経験から学ぶ心構えを減退させるとすれば、極めて由々しいことである。若い世代の現実政治への失望感が、ドイツの過去への無反省な態度を許容する温床となりかねない。そしてまた、現実離れした極端なユートピア志向が、一部の若者をかえって過激な方向に走らせることにもなる。グラスが懸念するのはこの点である。また、彼が当時のブラントに期待していたのは、ひとつには彼にドイツの歴史を踏まえた現実への働きかけが具現されていると見ていたからでもある。

とはいえ、自らの過去の経験にもとづいて現状を判断するこうしたグラスのやり方は、変化する状況への目配りを欠いた偏狭な経験主義で、若い世代にとっては自分たちから遊離した古いインテリ（「屑鉄」）の言葉としてとられているという見方もある。<sup>(73)</sup> それによると、グラスは53年の東ベルリンでの労働者の暴動の時のブレヒトと同様、民衆離れし、作家の役割ゆえに自らを市民と同一化することを放棄しているという。確かに、民衆啓蒙の野心は彼にもあるのだが、ただ、当時の社会状況の分析には、それなりの正当性を認めないわけにはいかない。親たちの世代が不安からナチズムという過去を精神的に排除したように、子供たちの世代は政治に失望するあまり歴史離れ・政治離れしようとしている。このメンタリティーは極めて「ドイツ的」である。ナチスを支えた

(72) G. GRASS: Ein Gegner der Hegelschen Geschichtsphilosophie. In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.109.

(73) Vgl. Günter Grass, Ein Europäischer Autor. ebd.

メンタリティーはその都度違った形でよみがえる。グラスはよく作家とは「過ぎ去る時に抗して」<sup>(74)</sup> 書くものだというが、それはこうした繰り返し起こる歴史離れの傾向に抵抗しようとするということでもあるはずである。歴史と現実生活との接点を見出し、生活の中に政治の影を見てとることによって、時間が我々の頭ごしに過ぎ去ることに抵抗する。そこに生じる時間こそ底辺民主主義の前提だからである。パーシングII西独配備決定に際しての反対の論拠のひとつに、このロケットが準備する時間を相手に与えないうちに攻撃できるということをグラスは挙げているが、この警告の時、考え直す時間を許さない方向への方針決定が、彼には正に非人間的・非民主主義的だったのである。当然、こうした考え方はドイツ統一問題に対する彼の考え方にも受け継がれていく。<sup>(75)</sup>

アウシュヴィッツの後には、いかなる伝来の美德ですら野蛮さを秘めているということを考えずにはいられない。これが現代文学の出発点となる。終戦直後に、ふたたび学校に戻ったグラスは、歴史の教師がこのナチスの時代がまるでなかったかのように「どこまででしたか」と中断後の最初の授業を始めようとした時、その場で席を立ち出ていったという。このエピソードは「アウシュヴィッツ」に代表される過去がグラスにとっては無視してもらいたくない「区切り」となっていたことを物語る。ところが、学校での「歴史」は超時代的に連続し、ナチスなどなかったように行われていたのである。それに対して、いかなる美しい夢にも黒さがあり(『犬の年』)、いかなる新築の家の壁にも死体が埋め込まれ(詩「新築」)<sup>(76)</sup>、どんな家の地下室にも洪水の跡が刻まれている(詩「洪水」)<sup>(77)</sup> というイメージが、後の彼の作品では繰り返される。さらに、批判的態度を保つために、文学で現実世界へのアンチテーゼとして美的世界を構築しアンガージュするという議論にすら、文学の純粋化の言い訳を見る。そこに文学の自己批判の欠如を感じているのである。<sup>(78)</sup> 文学とはもっと危険な綱渡りであり、シェークスピア以来、劇作家は劇場の「放火犯」であった、と詩「ゲ

---

(74) ちなみに、これは Luchterhand 社刊の1989年から91年までのグラスの政治・社会に関する講演・論文・対話集の題名でもある。(Günter GRASS: Gegen die verstreichende Zeit. ebd.)

(75) Vgl. G. GRASS: Ein Schnäppchen namens DDR. ebd.

(76) ebd.

(77) G. GRASS: Hochwasser. In: Werkausgabe Bd. I. ebd., S.16.

(78) G. GRASS: Von morgens bis abends mit dem deutschen pädagogischen Wahn konfrontiert. ebd., S.245.

一テ」<sup>(79)</sup>は歌う。従って、五〇年代の劇場への補助金制度などは、明らかにこうした文学の危険性を馴化してしまうものだ、とグラスは批判しさえしたのである。

グラスと歴史との関わりは、「アウシュヴィッツ」という過去との対決に始まり、現代では純粹ということが決してありえなくなったという認識を深めていく。『犬の年』に「なにものも純粹ではない」という一節があった。<sup>(80)</sup>これは強制収容所前にあるボタ山が実は人骨でできているということを人々が薄々感じているとされる箇所である。「石鱈」ですら純粹に洗い落とすことはないというこの長いリフレインの最後は、もちろんそれが虐殺された人間の死体から作られたものであることを暗示している。この一節を小説の中に入れるようにと特にすすめたのが、パリで親交のあったユダヤ人で自らもナチスの迫害を受けた詩人パウル・ツェラーンであったことを、彼は後年しみじみと回想する。<sup>(81)</sup>白いはずのミルクを「黒い」と感じたこの感性とグラスとの共鳴が自ずと想像されるところである。

同時代のことを描く際には、「過—現—未(Vergegenkunft)」という第四の時間感覚を駆使し、時代が安易な方向に流れ始める時には、その「過ぎ去る時に抗する」ための拠り所とした。小説『蝸牛の日記から』の創作モチーフを、グラスはユダヤ人虐殺のことを「子供たちにどのように言うのか?」という問いだったと述べている。<sup>(82)</sup>69年当時に選挙旅行に出ていた彼は週末ベルリンに帰ってきた時、ユダヤ人虐殺について「それでその時父さんはなにをしたの?」という子供たちからの問いに直面させられた。グラスはその問いに対して、その頃自分はまだ若すぎたのだと言いかけて、口ごもる。はたしてもっと齢をとっていたらプロテストしただろうか、と。そこで彼はハイネの小説を通してユダヤ人シナゴークについて研究していく。この考察がこの小説の一部を成す。「ドイツに起きたことはなんであれ、数百年前に始まっていて、まだ終わっていない」ということを子供たちに語ろうと思って、ハイネの「ラビ」を一五世紀から二〇世紀へと逃れさせようと試みる。そしてそうすることで、六〇年代を三〇年代に追いつかせ、過去の標準化する力に抵抗しようとしたのだという。

(79) G. GRASS: Goethe oder eine Warnung an das Nationaltheater zu Mannheim. In: Werkausgabe Bd. I. ebd., S.103.

(80) G. GRASS: Hundejahre. Darmstadt 1985. S.249f.

(81) Vgl. G. GRASS: Schreiben nach Auschwitz. ebd.

(82) Vgl. G. GRASS: Wie sagen wir es den Kindern? ebd., S.755ff..

だが一方で、これは創作面のことだけではなく、目の前の社会的問題に対しても、『蝸牛』の語り手は異議をさしはさんでいくのだった。彼は社会で立場を決めることは自分が子供の父であり、家庭の夫である以上避けられないことであるという理由から、例えば、選挙という現実の葛藤・衝突にも身を置くことを辞さなかった。それが同時代人にとっての歴史的帰結でもあったからである。

急速に進展する時代のテンポ（；例えば、東西ドイツ統一過程について、統一という「列車は出発し、もはや誰にも止められない」と言われた。<sup>(83)</sup>）に対して、ひょっとしたらこうした異議申し立てから議論のための時間が生じ、考え、疑い、深められる可能性がもたらされるかもしれない。『蝸牛の日記から』では彼は進歩を「蝸牛」になぞらえたが、後年これを訂正し、「蝸牛」はゆっくり進むのではなく、むしろ我々の一周先を行っている、とした。つまり、歴史の流れは急で、さし迫った問題が多くあるというのに、我々の思考の方はついてゆけなくなっている。ましてや、我々の議会制民主主義はこの「蝸牛」にはまったく遅すぎるのである。ただ、かといって彼は革命ユートピア的「跳躍」には反対なので、彼に残された武器は批判を通した議論となった。その際、彼にとっての批判は単に民衆を上から教化するものではなく、新たな可能性への仲介という役割をも担わねばならなかった。つまり、彼はそこでは一般的な考え方とは必ずしも同じではない自分の考えをあえて提示することで、より多様な議論の場をラジカルに摸索していたと考えられるべきなのである。特権的インテリとしてではなく、こうした市民として、生活者として個の立場を持つことがなによりアンガージュマンということなのであろう。これによって現実と自分とを結ぶ土台ができるはずだからである。

文学はいわゆる「<sup>ヒストリー</sup>歴史」のアルタナティーヴエとして、そこで失われたものを取り戻し、もうひとつの歴史を正当な光のもとに押し出す。こうした営みである文学はとりたててアンガージュしなくとも、それ自体「アンガージュマン」であるとも彼は言う。また、あらゆる文学は社会に対して書かれるのだから、政治的要素を持つとも述べる。<sup>(84)</sup>「対象を名付けることが、すでに文学でのアンガージュマンです。」と彼が言う根底には、「政治は私たちの現実の一部にすぎない。」とするとならわれない現実観がある。従って、彼にとってはアンガージュ

(83) Vgl. G. GRASS: Der Zug ist abgefahren – aber wohin? ebd.

(84) Vgl. G. GRASS: Ein Gegner der Hegelschen Geschichtsphilosophie. ebd., G. GRASS: Die Verzweiflung arbeitet ohne Netz. In: Werkausgabe Bd. X. ebd., S. 136ff..

ユマンの文学とは白い白馬と言うのと同じくらい矛盾しているのである。<sup>(85)</sup>文学においては、ファンタジーという足りないもの・失われたものを現出させる力が、安易に画一化し硬着する狭い意味での現実への抵抗となる。この点については、文学は現在との関わりで歴史を見ることで「現実を広げていく」<sup>(86)</sup>という言い方もなされていた。

このように、グラスは歴史を反省し、その間隙を埋めることで創作と政治活動両面においてアンガージュする作家である。彼は「アウシュヴィッツの後に書くこと」の証明として、現実の多様化を目指し、「灰色」のニュアンスを擁護しながら画一化に、モノトーンに抵抗してきた。そしてまた、彼はこれからもそうし続けていくはずである。文学の「歴史の埋め役」としての役割が不必要となる時代が来るとは、当面考えられないだろうからである。時代は未だ満たされぬ喪失の空白を名指しつつ、宥めてくれる存在を求め続けている。

---

(85) G. GRASS: Vom mangelnden Selbstvertrauen der schreibender Hofnarren unter Berücksichtigung nicht vorhandener Höfe. In: Über das Selbstverständliche. ebd., S.107.

(86) G. GRASS: Werkausgabe Bd. X. ebd., S.379. (「私がまさに望んでいることとは、リアリズムの概念を拡大することです。つまりそれに、無意識、ファンタジー、夢のようなもの、ファンタスティックなものも含めていくのです。」)